

さて、近年我が国では、隣人に干渉されたくないし、隣人に関心も持ちたくないと言った、誤解された「個の尊重」があり、地域のコミュニティ意識が希薄になっているとの指摘があります。お互を正しく理解し、助けあうことこそが真の「個の尊重」のあり方ではないのでしょうか。住民同士のふれあいのある町は、犯罪に強い町であると云われています。

そして、実は災害に対しても強い町なのです。あの阪神大震災のとき、被害の激しかった長田区にあって、非常に被害の少なかった地区がありました。真野地区といいますが、この地区は日頃から地域コミュニティがあったため、住民のバケツリレーによる消火活動が行われて、被害を最小限に食い止めたという報告があります。このことは、日頃からこの町に愛着を持ち、自分達の町であるという誇りを持っていることの証であるといえます。

田中野田町内が、今後さらに魅力のある町としてあり続けるためには、それぞれが責任を持ち、自分達の町として、人任せではなく、自ずから手で住み良い町づくりを進めるといふ、積極的な参加意識のより一層の高まりと、近所隣同士が親しくつき合うことが大切なことではないのでしょうか。



第5回 御南ふれあい朝市のアトラクション
で活躍する子どもたち (9/23・記者編)

角田和子様(9組)より、香典返しとして町内会へ
金一封をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

当面の行事予定

- ☆10月4日(日)：田中野田秋の清掃
西養護学校運動会
- ☆10月11日(日)：福祉センター運動会
- ☆10月17日～18日(土・日)：白鬚宮秋祭り(今年は田中が秋祭りの当番ですので、来年は田中野田が当番になる予定です)
- ☆11月1日(日)：福祉センター祭
- ☆11月28日(土)：同和教育の会(御南中学校区)
- ★11月下旬か12月上旬の日曜日に、前回のよう田中・田中野田町内会親善グラウンド・ゴルフ六会を実施するよう検討中です。

わが郷土を語る(その36)

中尾 佐之吉

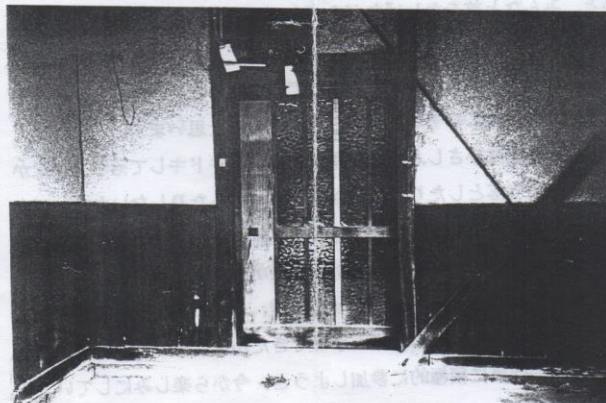
昔は、敷居が高かった

1) 高い敷居のこと

敷居とは、戸・障子・ふすまの下にあって、それをあけたてするための溝のついた横木とあるが(広辞苑)、ここでは、玄関の敷居のことについて書かせてもらおうと思う。それは、昔は、敷居が高かったということである。

昔から「敷居が高い」ということばがある。これは、広辞苑によると「不義理または面目のないことなどがあって、その人の家に行きかねること」とある。しかし、ここでとりあげる「敷居の高さ」のことは、全く建築構造上のことである。

次の写真は、最近まであった近所のお家の玄関である。玄関の戸は、板戸と障子の二重になっているので、敷居の幅も広く大きい。しかも、敷居の高さが地面から20釐くらいあった。



2) 敷居にあがって叱られる

玄関であろうと、家の中であろうと、「敷居のうえに乗ってはならない」(乗るといふ表現は柳田国男さんの著書による)ということは、誰でも守らなければならない行儀作法の基本ということになっていると思うのだが、(禁忌事項の習俗という見方もある)幼児の頃の私には、このようなきまりは知る由もない。そこで、草履をはいたまま敷居にあがって中へはいると、そこのおばあさんに「こりゃこりゃ敷居はまだいで入るもんじゃが」とよく叱られたものである。幼い私には、敷居をまたぐことが簡単にできないのであったが、おばあさんはこれを許してくれなかった。(わが家でも、玄関の敷居は同じように高かった。しかし、家ではたいてい勝手口から出入りしていた。これは、敷居が高くなかったのだ。しかし、他家へ勝手口から顔を出すことは、こども心にも気がひけた。勝手口は台所にも通ずるからである。)

3) 今は、玄関の敷居も低くなった

つぎの写真は、新しく建てられた同家の玄関である。玄関の戸は、敷石に直に敷かれたレールの上を動くので、もう昔のような高い敷居はなくなってしまっている。そして、いまではこの地方の古い家でも、玄関だけは新様式に改造されていて、高い敷居はほとんど見られない。また、洋式の家では、玄関の戸もドア式になって、敷居も姿を消してしまった。

もう、こども達も、「敷居へあがった」と叱られることはないであろう。しかし、私には、叱られた昔がなつかしい。いまは、再び見ることでできなくなった家とともに。

「古い家のない町は、思い出のない人間と同じである。」というドイツの謔があることだが、この町内では、土地区画整理などで、古い家は少なくなり、そして、思い出の川も橋もなくなってしまった。

